

問題生徒の発見とその指導（第二報）

| | |
|-----|---|
| 著者 | 田辺 啓三, 幸山 彰一, 光谷 音吉, 高瀬 允, 竹内 昭, 松扉 繁麿, 野々市 幸子, 亀田 富子, 出石 隆 |
| 雑誌名 | 高校教育研究 |
| 号 | 14 |
| ページ | 7-32 |
| 発行年 | 1963-03-10 |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/00063390 |



問題生徒の発見とその指導(第二報)

—継続観察と指導の実際—

金沢大学教育学部附属高等学校

| | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|
| 補導部 | 田辺 啓三 | 幸山 彰一 | 光谷 音吉 | 高瀬 允 |
| | 竹内 昭 | 松原 繁麿 | 野々市幸子 | 亀田 富子 |
| 研究部代表 | 出石 隆 | | | |

一 昨年を受けて

本校の生徒指導上の急務は昨年度と同じように「問題生徒の発見と指導」にあるが、昨年まではその「早期発見」と「継続観察」とが重点となって仕事が進められておった。今年からは、それをもう一步進める意味で、「継続観察と指導の実際」に重点を置いた。早期発見についても、まだまだ不十分な点が多いけれども、一応、学校側の生徒指導の心構えもでき上っており、生徒数の少ない本校の現状では、異常な生徒の発見は比較的容易であると思われるので、指導の実際を重視した。問題生徒の発見と指導についての、理論的、科学的研究が大切なことはいうまでもないが、直接生徒を預っている我々高校教師にとっては、どんな生徒をどのように導いて行くか、少しでも明るく健康な生活が送れるようになるにはどうすれば良いかという、極めて具体的な実践的な仕事の方がより大切であると思われるので、「指導の実際」を重視した。そして指導と観察とは表裏一体のはたらしをなすという考えのもとで、「継続観察と指導の実際」を重点目標に選んだのである。

ここで、昨年の歩みを振り返ってみると、いくつかの問題が不完全なまま、あるいは未解決のままに残されているが、特に昨年に加わったと思われる点を次に上げて見たい。

1 早期発見

YGテスト、ホーム主任の観察は従来通りであるが、今年は悩みを持っている生徒の申しいで、友人、家庭からの連絡を円滑にするよう努力した。

2 継続観察

ホーム主任が中心となるのは従来通りであるが、関係教官の連絡を密切にし、定期に、又は随時会合を開いて生徒の掌握に努める。そのためには、指導の組織と体系の整備が必要となってくる。なお必要に応じて、対外諸機関との連絡をとることも重要なことである。

3 指導の実際

継続観察と指導の実際は、ことばを変えた同一表現とも見なすことができるが、指導の組織と体系を確立して、その上にたつて、ある問題を持った一人の生徒に対して、どのように指導してゆくかということが、生徒指導の一つの極であると思う。従って、その仕事がかつ、成果の目に見えぬ地味な作業であっても、われわれ教師は、そ

の責任の限界に疑問を抱きながら、生徒への愛情と熱意に駆られてこの仕事に励んでいるのである。

二 問題生徒の早期発見

1 YGテスト

37年5月10日実施（再調 6月5日）

調査人員 481名（全生徒）

問題生徒 27名（5.6%）

| | 1年 | 2年 | 3年 | 計 |
|---------------|----|----|----|----|
| N型（傾向あるものを含む） | 3 | 4 | 1 | 8 |
| E型（同上） | 7 | 5 | 1 | 13 |
| 要観察 | 2 | 3 | 1 | 6 |
| (YG個票図1～12) | 12 | 12 | 3 | 27 |

（昨年は487名中30名で 0.6%減）

なお、YGテストに見られる本校の特色については、高校教育研究第13号参照。

2 ホーム主任の観察

4月に新しい組替えや、新入生を迎えて、ホーム主任はできるだけ早くホームの生徒を覚えようと努める。毎日15分のショートタイムに、放課後の清掃時に、学校集会やその他の会合に、主任は、授業を通して以外に、自己のホームの生徒を観察する機会は非常に多い。それらを通して変わった生徒を発見することも多いが、それにしても、一度に多数の生徒をながめていて、そのなかから異常の生徒を見つけるには、絶えず細かく眺めているという細心の心掛けが必要である。欠席した生徒、会合の際に騒がしい生徒、ホームルーム活動で関心を示さない生徒、諸納入を怠る生徒……等々。しかし、集団の中から発見することは、どうしても見逃しがちな場合が多い。本校では、以前から、ホーム主任と生徒との懇談の時間をもちたいと検討しておったが、今年からその時間を持つことになった。従来は、中間試験と期末試験の成績が揃った時に、生徒を一人ずつ呼んで、主として成績についての懇談を行っていたのであるが、今年から、ロングのホームルームのうち、月一回は個人面接に使って良いことになった。また、週二回から三回、中食時に、適宜面接の時間を持つことになった。このようにして、主任が常時、生徒と個人的に話ができるようになったことは喜ばしいことと思う。

このような結果、YGテストでは特に異常が認められなくとも、主任として注意しなければならない生徒、絶えず相談相手になってやらなければならないと思われる生徒が何人か浮きあがってきた。そのうち、今年特に取りあげた生徒は次の通りである。

| | |
|-----|----|
| 1年生 | 1名 |
| 2年生 | 2名 |
| 3年生 | 5名 |

3 申しいでによるもの

以上の他、本人が直接悩みを訴えてくるもの、友人や家庭から申しでてくるもの、ある

いは他の教官やその他からの申請は例年いくつかあるが、今年は、特にこのような申請をし易い環境にしようとして学校として努力を払った。提示される問題は、極めて些細な出来事から、大きいのでは我々の手に負えないようなものまで、種々雑多な問題が与えられるけれども、そのうち、問題生徒として継続観察の対象に選んだ生徒は、3年生3名である。

以上、合計38名が今年の問題生徒として抽きだされた。しかし、彼等が悉く健康な、正常な精神の範疇から逸脱しており、他の生徒が正常であるという意味は勿論ないので、彼等も実は極めて健康であり、その性格が多少片寄っておったと思われる場合も多いのであるから、君が問題生徒であるという印象を本人および他の生徒にも極秘にしなければならぬ。学校から特別な目で見られていることがわかったならば、その指導は既に失敗であろう。また、われわれとしては、いたずらに彼は異常ではないのだろうかという詮索の眼で生徒を眺めることも厳戒すべきである。

三 継 続 観 察

1 YG所見における昨年との比較

イ 現2年生で昨年と同所見の生徒5名（YG個表3, 10）内、2名の生徒の個表をくらべてみると、両人とも大差はないが、C生徒では、情緒は少し安定気味、活動性も少しかつてきたように思われるが、N傾向は依然残っている。J生徒は昨年と殆ど変ることがない。

ロ 現2年生で新しくでた生徒7名（YG個表2, 4, 7, 8, 10, 12）このうちE型2名、N傾向2名で、他は観察を続ける必要のある生徒3名である。

ハ 2年生になって異常の現れない生徒7名

ニ 3年生については、今年抽出された3名は共に昨年もあがっておった生徒である。従って、3年になって新たに発見された生徒は皆無である。このことは、YGテストの一つの信頼度を計る資料ともなり、早期発見という立場から見ても、ある程度目的が達せられているように考えられる。なお、昨年異常所見があつて本年度それが見られなかった生徒は4名である。2年生の7名を合せて、計11名であるが、彼等がどのような原因でよくなったか、あるいははじめから特別に異常はなかったかという、YGテストの判断の問題になると、われわれは正直な所、確信を持って言えるわけではなく、専門家に委せなければならないが、3年某生徒は中学3年で実母を失い、つづいて継母を得たが、その為の精神的動揺はかなり激しく、しかも高校に入ってから成績不振が目立ってきて、相当劣等意識に悩まされておつたが、2年の一学期末から成績が上るようになって精神も立直つたようである。それについては、1) 本人が家庭の事情を理解できる年齢になった。2) 継母が極めて立派な人で、精神的に本人を力づけてくれた。3) ホーム主任の適切な助言と激励が本人の意欲を高めた。以上のような諸点があつて、勉強にも励み、友人と明るく交わるようになった。その他の生徒についてみると、少しく異常と思われるもの4名、大分よくなったと思われるもの3名、他の生徒ははじめから正常と変りないが、あるいは隠れている傾向があるのかもわからない。

ホ 卒業生の動向

参考までに、本年三月卒業生で、YGテストに異常所見のあつた生徒の卒業後の動向について述べてみたい。

所見のあった生徒は12名、そのうち進学希望者は11名で、就職希望者1名である。進学した生徒3名で、彼等は異常所見はあったが表面的には正常であり、熱心に勉強して、それぞれ優秀な大学に進学している。従って内在的には異常性があつたとしても、問題は何もなかった。就職の1名は女子であるが、進学か就職かに相当煩悶もしておつたが、家庭、親戚、ホーム主任からの適切な指導で、現在極めて明朗に励んでいるようである。浪人が8名もいるのは、やはりYGテストに異常のある生徒が、能力的に、精神的に負担を受けていると感じられるが、そのなかで、意志弱く情緒不安定で動揺している生徒が大半であり、性格的に、あるいは能力的に希望校への進学が無理であつたといわれる。現在は、みんな勉強に励んでいるようであるが、このままでは来年も危険ではないかと危ぶまれるものも感じられ、大いに頑張つて欲しいと願っている。

2 生徒観察要録の整備（別紙）

従来、生徒の観察記録はまことに簡単なもので、1、観察事項（行動記録・主任の判断・その他）2、原因と思われる事項（家庭・交友・学業・身体・その他）3、指導事項（個人面接・家庭訪問・校医その他の連絡・その他）の3項からなり、半紙半枚の用紙を使用しておつたが、今年から、項目を細分し、その種別、原因、家庭環境、生活状況等についても相当詳しく記入し、観察記録の部分をも十分に使用できるように配慮した。観察要録の整備が、生徒指導の第一歩であるという考えである。

3 観察指導の組織と体系

継続観察ということは、また実際的な指導ということにもなると思うので、ここでは観察指導ということばを使いたい。ここにおける活動の中心は既に述べたように、ホーム主任が中心となっている。しかし、ホーム主任が、それぞれ独自の立場で、独立して実際活動をやるなかにも、学校としての組織が完備していなければ、活動は不十分である。また組織を強化すると同時に、指導体系も確立しなければならない。その組織も広義には体系のなかに含められると思うが、この場合、体系というのは主として指導法に関するものを指しているのである。指導の組織と体系を整備強化することもまた、生徒指導の重要な一段階であると考えている。

イ 組織の強化

本校の生徒指導の組織は昨年と同様であるが（高校教育研究第13号参照）次の諸点を特に強化した。

a) ホーム主任と補導部との懇談

従来は年3～4回であつたが、学期毎に2～3回を定期的に、その他必要に応じて随時行なう。

b) 学年主任会

従来は年2回であつたが、これに補導部も参加して学期に2回、ただし、生徒指導以外の学年主任会は別である。

a)、b)の会合において、問題生徒についての情報交換を行なっているが、将来は更に展開させて、研究発表などの機会を持ちたいと思っている。できれば職員会議などに行なってみたならと思っているけれども、まだこの点について成案は持っていない。

c) 補導部会

従来も生徒指導のための補導部会をしばしば持ったのであるが、昨年からは研究部主任も参加して調子は高まっている。さらに、本年は専門家をたびたび招聘して、その指導を受けて来た。昨年は幸い現金大名誉教授村上賢三先生を校長にお迎えして大変好都合であったが、今年は金大の多田治夫先生には一方ならぬ御指導にあずかっている。

d) その他、教科担任教官、クラブ指導教官、その他の教職員等の連絡も密にして、学校全体が一体となって生徒指導にあたっているという気風をもちあげ、生徒にもこの気持を十分理解してもらって、いつでも、だれでも、自己の悩みや、友人の問題を学校は聞き入れてやるという気持を、生徒が持ってくれるように心掛けている。ただ、この場合には、あくまでも公表をさしひかえ、余計な神経や臆測を生徒にいだかせないような配慮が必要である。

e) 青少年補導センター、県防犯課、高等学校指導部連絡会等、校外補導組織と協力して非行防止につとめること、父兄、友人らとの連絡を密にして、指導の万全を期すること、校医その他の専門家と連絡をとることなどは勿論である。

ただ、本校の問題生徒という場合は、一般的な意味でいう非行生徒とは違うのであって、非行を行なう要素も含んでいるもの、あるいは自殺的な傾向の要素を含んでいるもの、また、そういう危険な分子はなくとも、異常な性向を示している生徒を問題生徒と呼んでいるので、従って社会常識で言われている不良行為などもあるいは起り得る可能性を含んである場合もあり、これらも未然に防ぎたいと思っている。

以上、従来の生徒指導の組織の上に立って、その強化の実情を述べたのであるが、まだ不備な点がいろいろあると思う。

その第一は、専任の補導員がないということである。補導は厳密な意味では一対一の関係でなければならない。50人の生徒を一教師が観察し、しかも、教科の授業の余暇に行なっているので、その目は粗く、その仕事は雑になってしまう。従って、少なくとも専任の補導員が数名いることが望ましい。しかも、その人は専門的な学問を修めた人ということになると、高等学校としては不可能に近いかもわからない。第二は補導部の機構であるが、生徒指導には、健全生徒の育成と、問題生徒の補導の二面性があると思う。前者は主として訓育、躰という形であらわれ、従って、生徒を叱る場合が多い。これに反して、後者は友達となり、母となって助け育てる場合が多い。本校では、この二面を補導部が担当し（実際の指導はホーム主任が中心ではあるが）ているわけで、同一教師が一方で生徒にきびしく当たりながら、他の面でよき相談相手になるためには、よほどすぐれた人格と才能に恵まれないとむずかしいことだと思ふ。やはり、訓育担当と、補導担当とはわかれるのが適当と思う。生徒の悩みをだれに一番よく訴えるかという問に対しても、友人や先輩にくらべて教師がぐんと少なく、生徒課の教師がもっとも少ないという実態は、よく話に聞くとこである。それだけ補導部という所は生徒に嫌われているのである。第三には、相談室の完備、予算措置などがあげられる。

以上の諸点は、多くの学校に共通の困難点であると思うが、いくた不便な条件のもとで、貴重な時間をさいて、生徒を少しでも立派に育てようと努力されている多くの教師に敬意を表し、大多数の健康な生徒の、誠実と正義にみちた若い情熱に対しても、一人でも、道を誤らせてはならないと、生徒指導の重大さを痛感している。

ロ 体系の強化

組織を強化することとならんで、指導の方法を体系化してゆくことが、重要な生徒指導の手段であると思う。

ア) 受入れ態勢の強化

組織のところで触れたが、学校の全教官が一体となって生徒指導に当たっているという気風を高め、かつ、生徒が気易く先生に相談できるのだという雰囲気を自然に抱くようにする意図である。従って、先生と生徒が親しく打解けていることが必要であって、これは指導組織とは別な、家庭的な態度を作らなければならない。このことは、口では簡単に言えることであるけれども、実際は極めて困難なことである。教師としては、深い愛情と期待をいざることが必要であり、生徒は教師に対して絶対の信頼をいざくようにならねばならない。教師と生徒との、相互の信頼と愛情のうちに、自然にかもしだされる雰囲気である。近年、次第に教師と生徒とが難反しがちに感じられてくる時、この相互の信頼と愛情を深めることが、極めて大切なことであり、また困難なことであることを痛感しているが、本校全教官は進んでこの問題にとりくんで、楽しい学園作りにいそんでいる。

イ) 問題生徒の正確な把握

問題生徒の早期発見のところで述べたような方法によって異常な生徒が一応発見される。これらの生徒に対して、われわれはできるだけ精密に、かつ正確にその実態をつかまなければならない。そのためには、組織の強化の項で述べたように、可能なかぎり、あらゆる方法を講じて実態把握につとめている。実態把握のための材料としては、上記の諸機能を通しての方法の他に、高校以前の出生歴、学業成績の記録、環境調査、高校1年の夏期休暇に課する自叙伝等が、重要なものとなっている。なお、本年は知能検査の実施年にあたり、その結果も参考資料に使われている。このようにして、多くの手と、多くの目によって、できるだけ精密正確な実態を把握するのが生徒指導の重要なかぎであると信ずる。

イ) 原因の追求

問題生徒の実態が、以上のような手段と方法によって把握されると、必然的にその原因が何であるかを究明する段階にはいる。そして、この作業は、実態把握の過程のうちに大半はなしとげられている。われわれは、原因がはつきりとわかれば、問題生徒の大部は指導方針も確立できると考えている。従って、原因追求は、本研究の重要な目標の一つとなっているのである。前にあげた「生徒観察要録」に記載された材料にもとづいて、そして、指導の組織と体系の運用によって、その原因を正しくつかまなければならない。これについての、論証的、系統的研究はまだ行なっていないが、今までの体験から考えて、その原因と思われるものを大別すると、次のようにわかれると思う。

- ① 性格的なもの
- ② 能力的なもの
- ③ ある問題に直面しているもの
- ④ 連鎖反応によるもの

①の性格的な原因に起因するものは、もっとも本質的な素質に根ざしているもので、これの甚しいのは精薄児とか、精神異常者とかいうことになると思うが、そこまで行かなくとも、人はだれでも個性を持っており、神経質の傾向があるとか、衝動的な性格であるとかいう、多少の傾向を、何人も持っている。

しかし、それがごく軽度であるか、あるいは統御性が強い場合には、健康な人間ということができるのである。それが、何等かの誘発的環境に直面して、強くその傾向にかたむく場合も多いことと思う。従って、平素は正常であっても、ある環境におかれると、異常状態を呈するというのが、実際には非常に多いのではなからうか。

②の能力的なものというのは、主として学業その他の才能の面における劣等感をさすので、本校の場合などは、最も多く見られる例である。現在の教育では、自己の成績がどの辺であるかということは、小学校から既に明白な場合が多い。まして、高校においては、大学進学と結びつき、成績を上げるための努力は、本人も家庭も、そして学校もなみなみならぬものがある。特に本校の場合は、殆どの生徒が進学を目指しており、しかも彼等は中学時代は、その学校の最優秀生ばかりである。このような生徒が本校において、更にトップクラスに属する生徒と、最下位に属する生徒とにわけられて、その位置に身動きできなくなれば、だれしも焦燥と劣等感が生まれてくることと思う。生徒は大体、中学2年生頃から自意識が深まり、次第に自己を認識するようになる。しかも不都合なことに、付属高校に入学した本人に対しての、親兄弟、親戚らの寄せる期待が極めて高く、自己の力を認識した生徒は、その期待を維持するために偽善的な態度にでる場合が多い。あるいは自分は既におくれてしまったという意識のもとで、偽悪的態度にでる場合も多い。かくして劣等感に、このような環境的要因が加わって怠学とか、その他の非行行為に走る生徒、あるいは消極退廃な生活にとじこもる生徒らがあらわれてくる。従って、彼等は、もし多少とも成績が向上すれば、次第に積極的な明るい生徒になることは、既にいくつかの例が証明してくれている。劣等感のなかには、このほかに、身体的欠陥のあるもの、消極的な性格の生徒などにも見られるが、それらの欠陥は、若しこれを補う優秀さが他にあることを自覚すれば、殆ど問題にならない場合が多い。

③のある問題に当面している場合もかなり多い。これについては、たとえその原因がはっきりわかっても、これを除去できない場合も多いようだ。実母が亡くなって、継母を新しく迎えたとか、自分が養子であることを知ったとか、こういう家庭環境に根ざすものは、大変難しい問題で、もしそこに確執があるときは、処理に窮する場合が多い。また末子である為に甘やかされた、父母が家庭に不在がち、躰が厳しすぎる、放任している等々、学校に問題がある場合よりも、家庭に原因のある方が遙かに多いようだ。その他、本人自身に問題がある場合としては、失恋をしたというのが相当多い。それから、ある事で強い恥辱を受けた、困難な問題に数日間たずさわって疲労した、ある失敗をしでかして叱責された、責任の重さを痛感したなどが原因となって、一時的に異常現象を示すことが多いが、これらは、原因を取り除くだけで解消されるもの、あるいは、原因が除去できなくとも、新しい希望をいだけ事によって立ち直るものなど、今まで解決された例が多い。

④の連鎖反応によるものというのは、学校という特殊社会にあって、一つの現象が起ると、他の生徒にも同じような反応を起させることを言う。3年生になると、受験勉強がはげしくなり、自然とそれに追いつけなくなって息切れするという生徒がでると、自分もなるかも知れないという不安が高まって、なつては大変だという気持と、なつてもよいという心が交錯し、次第に怠学するようになる。彼はノイローゼになった、自分もなりそうだという心理が、なつたように思いこみ、そんな症状を呈するという例もある。人がラジオの受験講座を聞きだしたから自分も聞かなければおくれる。家庭教師についているからお

れもつかなければという心理は、不安定な3年生の精神生活においては、よく起る現象のようである。1年生でも、休み時間を惜しんで勉強しているから自分もしなければという気持ちがお互いにおこってきて、みんなが暗い心で休み時間を惜しんでいるのを見かけると、われわれまでが暗くなる。同じような環境のものが集まって生活している学校であるから、このようなムードがかもし出されるのは当然であるが、われわれは、そのムードをできるだけ明朗健全なものにしたる指導が必要であると思う。幸いにも、現在の3年生は、近年にない明るいムードを作りあげているので、2学期の現在においても極めて楽しい学校生活を送っているようである。それでいて、自分の時間をしっかりと持っていて、その時には耳をかさずに勉強し、息ぬきの時間は汗を流してとびまわっている。生徒同志の協力がきわめて強い。このような態勢が作られるならば、ムードの異常化に対する指導は適切であると信じている。そしてこれが成就されるのは、生徒相互の理解と愛情と信頼、また教官と生徒間のそれがなければだめであると思う。

以上、原因となる4つの場合をあげたがこれらが相互に交錯しあって異常現象の起る例が実際には多いようである。従って、教師は生徒の家庭環境、対人関係（特に交友関係）、精神的、身体的諸条件について、綿密な調査を行なって、その原因を正確に追求しなければならない。

d) 観察と面接指導

原因の追求によって、異常現象の実態が正しく把握されてくる。そして、最後になされる作業が、その生徒に即した適切な指導となる。その中心をなすのが継続観察であり、更にその主要部を占めるのが面接指導である。もしその原因が除去できるものであれば、この生徒の指導は比較的容易であるが、その原因が除去できない場合も多い。しかし、この場合も、先に述べたように、その悩みに打ち克つような他の材料を与えて、それに当面の目標なり、希望なりを抱かせるとか、その原因を分析して、最少限の程度にとどめて忘れるようにつとめさせるとか、そのケースに応じた指導が必要となる。そして、このような場を構成する、もっとも多い機会は面接である。この場合、冷静な理性と公正な判断力が必要であり、指導の理論と方法を体得しなければならないが、何よりも大切なことは教師の愛情と生徒の信頼であり、愛情と信頼に培われた、深い人間的なつながりこそ、生徒指導の究極ではないかと思う。そして、そこに流れている一貫した筋を継続観察と呼びたいのである。

四 指導の実際

継続観察が既に実際の指導となっているが、同じような異常現象が、同じような原因に起因すると思われる場合が多いけれども、それに対する適切な処置というもののまでが、必ずしも同一であるとは言えない。むしろ一人に対する指導が、その生徒にとっては適切であっても、他の生徒に対して適当でない場合が多い。結局、生徒指導ということは、個々の生徒に対して、それぞれ独自特有の指導がなされなければならない。最近特に、集団指導の中における個別指導ということが強く取上げられているけれども、これは結局は個の指導の一方法であり、問題生徒の指導に関する限り、あくまでも一対一の関係において、ケースバイケースで行なわれなければならないと思う。従って、前述観察指導の組織と体系の上に立って、愛情と信頼の人間関係のなかにおいて、個別の指導が適切に

行なわれることを切に望んでいる。

主な実施事項は次の通りである。(本年度分)

- 4月26日 補導部会, 本年度の計画立案
- 5月4日 金大の多田先生をお呼びして指導を受ける。
- 5月10日 YGテスト実施。
- 5月20日より YGテスト結果に基づきホーム主任と懇談。
- 6月4日 第一回学年主任会, 学年毎の問題生徒抽出。
- 6月5日 YGテスト再調。(資料不備の分)
- 6月8日 多田先生と第二回懇談。
- 6月9日 ホーム主任と懇談。
- 6月14日 金大鈴木先生招聘, 知能テストとの関係について指導を受ける。
- 6月20日 生徒観察要録作製。
- 6月26日 ホーム主任と懇談。
- 7月2日 第二回学年主任会, 要録記入の要請。
- 7月19日 夏期休暇に入るので, 職員会議席上, 特に全教官に協力依頼。
- 9月4日 ホーム主任と懇談。
- 9月18日 補導部会で, 研究会のための細案の検討。
- 12月2日 第三回学年主任会, 要録提出依頼。
- 10月5日 観察要録の中間整理。

最後に実際指導において, 三つの発見経路にわけて, その一部の生徒についての性格傾向又は観察要録を紹介したい。

1 YGテストによるもの

イ) 1年 A生徒(YG個表(1) A) ホーム主任

N型(神経症)傾向

家庭環境 父は精神病で入院したことがある。母が勤めにでている。6人兄弟の3番目、生活が苦しく、現在育英資金を受け、PTA会費、授業料の免除も受けている。

性格、無口でおとなしいところあり、友人はほとんどいない。ホームの生徒も、つきあいくらいの人間だという印象をいっている。諸納入費免除の申請も、本人だけが相談に来て親はやってこない。親に来校するように依頼して、漸くやってきたが、親は納入費免除の件を一切知らなかったようだ。遠足等の諸行事には参加しているが、だれともあまり話をしないで、さびしそうな態度である。

(性格傾向のみ)

ロ) 2年 D生徒(YG個表(4) D) ホーム主任

N型

家庭環境 両親健在, 兄弟2人。

学業 中程度でわずかに上昇している。まじめに学習しており、特に目立つ点はない。クラブ、生徒会柔道クラブ所属、生徒会役員はやっていないが、生徒会、ホームの一員として、それぞれによくつくしている。

友人関係 交友関係はそんなに広くないが、相当交わっており、親友もいるようだ。

性格 やや内気で、気の小さい点はある。

以上のように、この生徒は、YG所見にかかわらず、家庭、学業、健康、交友等に比較的恵まれており、現在異常と見なされる点は発見されない。R（衝動的性質）が高いので救われているという判断が下されている。

ハ）1年 F生徒（YG個表（6）F）ホーム主任

（情緒不安定）

E型（N的な感もする）

家庭環境 兄弟二人は大学在学，両親健，4人兄弟。家庭は教育に熱心である。

学業 中学時代全課目5，特に理数科に秀れていた。高校に入って中の下程度，知能検査は70で優。高校の知能検査は59，中の上。

健康 幼児のとき耳鼻を患い，現在も鼻が悪いが，その他は健康である。

生徒会活動 中学時代はホームルーム会長，生徒会の要職にもあり，積極的に各活動の中心となり，責任をもって，自主的になしとげておったが，高校に入ってから，一切関係せず，極めて消極的である。

友人関係 中学時代は，進んで友人の世話をし，信望も大変厚く，生徒の中心的存在であった。高校に入って，ホームの生徒と口を利くこともなく，消極的になった。保健体育科で調査した，スポーツにおける友人関係の支持グラフを見ても，一学期初めの調査では本人はだれをも支持せず，まただれからも支持されていなかった。ところが，一学期末の再調査では，二人の生徒を支持し，かつ同じ二人の生徒から支持されているのがわかって，この三人が現在友人関係にあることが理解される。

なお，本人は地方出身であるために，友人がはじめいなかったことと想像される。現在下宿している。

観察記録

4～5月 ホームルームで，ホームの問題を討議して，活潑に意見が交わされても，本人は全く発言がない。他の生徒とささやくこともなく，孤独な印象を受ける。また，運動会の入場行進や，応援，仮装についての意見をまとめる際に，賛否をとったが，彼は一回も挙手していない。それでいて，他のことをしているわけでもなく，うつむきがちに於いて，討論の模様を見ている，時々，ひとりで笑ったりしている程度。どういう気持か理解に苦しむ。

5月11日，面接をする。友人はだれもない由，クラブも，おもしろくないから入っていない。話の最中，時々投げやりの言をはく。やや，反抗的な態度も見える。かと思うと，反対に，きわめておどおどした態度，あるいは思いつめた態度を示し，心の動揺のある感じだ。

運動会の日，生徒席に行き，本人に話かける。みんなが熱心に応援しているのに，彼はうしろの席で元気がない様子。種目は「むかで競走」に出たいという。非協力というわけではないが，極端に消極的である。体育科で調査した友人関係でも，彼だけが孤独であった。

6月中間考査の成績がでたので面接をする。成績は中の下。物理と数学が特に悪い。前回の面接の際と同様，ふてくされた態度と，深刻な態度の両面が見られた。数学担任の教師が授業中に，宿題の解答を，黒板に書くよう指名したところ，黒板に大きく「ワカリマセン」と書いてすましていた。教師が理由をただと，「わからないのはわかりません。」という。教えてやるからと言ってもわからないの一点ばりであった。その教師は，こん

な態度にでる生徒に接するのは十数年の教師生活で始めてのことであると述懐しておられた。あまりの非常識な、強気の態度に驚かされる。あとでこのことを話すと、恥しそうな態度で悪かったと言う。本心はどうかまだ正体がつかめないが、そんなに憎めない気がした。すなおな印象が感じられる。

7月 彼に、特別関心を寄せて、時々冗談をはなしかけると、多くはしやべらないが、笑顔で応答してくれる。授業態度もあんなことは以後ないようだ。学期末試験の結果は中間試験より20番ほどあがっていた。この辺に彼の明るくなった原因がひそんでいるのだろうか。

夏期休暇に入って一年生希望者で、二泊三日の水泳合宿を行なう。ホームの参加者24名勝手にグループを組んで3つの班を編成。彼は班長の某生徒と大変親しそうに遊んでいた。友達ができただけだ。水泳は自信あるらしく、楽しそうに泳いでいる。一人ぼっちで高校に入り、おたがいが負けまいと勉強しているのにおかれて、一学期は沈んでいたのかと思う。教室から解放されて伸び伸びしている様を見ると、私まで楽しくなってくる。少し、消極的で、口数の少ない点を除いて、ほとんど正常で、健康な感じをうけ安心した。

8月 一年生有志による例年の学校行事で立山登山をする。ホーム参加者21名、そのうち海とかねている生徒は4名のみで、彼もその一人である。こういう行事に積極的に参加してくれて嬉しい。このとき一番彼と親しい生徒は参加を申し込んで途中で取消したが、彼はそれを知っていて参加した。無口な態度には変りないが、楽しそうに3日間の生活を送っていた。

9月 元気な顔で登校した。一学期から現在まで欠席なし。無口な性質であるから、多くの友人はできないようだが、3人ほど、親しくしているようで、その友は、案外しっかりしているので、なんとなく安心した。このままで続いて行ったら心配ないと思う。

自叙伝より

幼時あまり丈夫でなく、相当両親に心配をかけていたらしい。一年間幼稚園に通う。小学校一年のとき絵がうまく、校内二等で表彰された。字はへたでいつも通知簿にその旨が載っていた。3年頃までは遊んでばかりいて楽しい思い出が多い。今の子供を気の毒に思う。5～6年の楽しい思い出が少ない。

中学校男女の仲がよくない。期待したほど楽しくはなく、生徒は一般に消極的である。勉強は殆どしない。試験はいつも一夜づけであった。卓球クラブに入り、毎日2軒走ったのが記憶に残る。某教師が特に意地悪くいじめているようで学校生活はあまり楽しくなかった。次第に反抗的になって、勉強もなまけ、成績がどんどん下って行く。両親からよく注意を受けたがどうしても意欲がわかない。

3年になり、進学を考える。一、二番でないといふ附属高校に入れないとされたが、テレビをみたりしてあまり熱中になれない。睡眠時間は9時間位、しかし、2学期に入って少しやる気になり、6～7時間の睡眠でがんばった。11月中旬から成績が上がってきた。無事高校に入れたときはやはり嬉しかった。

以上が、10月現在までの観察要録の概要であるが、地方中学では優等生であったようで、また同地区で顔見知りの生徒同志では自然指導的な立場に立てる力を持っていたようだ。それが、突然秀才ぞろいの、しかも未知の人々の間に入って、もともと内気な性格があった、すっかり自分の殻を作ったようである。しかし、何カ月かの生活のうちに、少しずつ

心もほぐれてきたのだろう。次第に明るい生活が持てるような気がする。ただ、無口で内気ななかにも、ある程度の反抗心もひそんでいて、それがうまくゆくと立派に成長する素質であるが、ともすると、相手に悪印象を与え、自分自身もつまづくことになりかねない。このあたりに注意を払ってゆきたい。2学期以降は、目立って口かずも多く明るくなってきたようだ。私にも冗談をいうくらいになってきた。

ニ) 2年 G生徒 (YG個表 ⑦G) ホーム主任

E型

家庭環境 両親ともに教師で家庭はきわめて教育熱心であるほか、特に変わったことはない。

学業極端に悪いが、知能指数は中の上で普通である。

クラブ、生徒会活動、剣道をやりたがっているが、現在は学校にクラブがないので、家で素振りをやっているらしい。生徒会では、応援団のリーダーをやって、大変はりきっている。こんな場がないと不安になるのではないかと思う。

友人関係 明るい性格で、多くの友人を持っている。

観察記録

5月 運動会ではクラスの応援団長として、鎧兜に身をかためて活躍、彼の趣味意向に合致している様子。

6月 個人面接を行なう。勉強部屋が明るい部屋に移ったこと、壁に教訓的なものをはりつけて日夜の励みにしていることなど語る。案外、自己に対して強くはない気がする。朝起ると、目覚まし用に軍艦マーチをかけているとのこと。中学時代から、個性が強いという評判のあったこと、成績にこだわらないことについて、姉などよく話題にする。政治や経済に特に関心を持ち、新聞もよく読んで意見もあるが、発表する相手や機会がない。現在、学力についての自信がなく、自分をさげすむ傾向が強くなっていることを自覚している。父母と将来について語ったことはない。目標を二年後半頃から樹立し、自信がわくように何か一冊の本をみっちりやって、精神的にもゆとりができるように自ら努力することが肝要であると述べた。

20日の集会の際、応援練習。彼はリーダーの一人として指導に熱心、節度ある行動を望んで、さかんに皆に呼びかけていたが、必ずしも自分の思う線にまで、訓練してやろうという程でもなかった。三年生もいたせいかな。しかし、思うようにリズムにのってくれないので、内心むくれていたようだ。その気持ちを尋ねてみたいと思う。

7月 終業式後、夏休みの計画などについて話をする。成績はきわめて悪い。

8月 北海道修学旅行、自由にグループを作らせたところ、みんな個性の違う数人が集まっていた。一寸おもしろい結びつきだと思うが、その理由をいつか尋ねてみよう。旅行中も、和氣にみち、長い車中でもトランプに興じていたり、普通の生徒と変わったところはない。

以前に、国粹的な書物を何冊か読んでそれから感銘を受けたようで、欧米崇拜を嫌い、天皇中心の国体に誇りをいだき、現在の世相にあきたりないものを感じているようで、やはり変わったところがある。

ホ) 2年 H生徒 (YG個表 ⑧H) ホーム主任

受理経路 YG及び父親の依頼

E型（情緒不安定の傾向がある。）

家庭環境

父 開業医（一流名士で身辺多忙）

母

兄 二人 東大医学部，金大医学部

姉 一人 高校生

弟 三人 中学生，小学生

兄弟が多いのが目立つが，家庭状況は極めて恵まれている。

学業 極めて低い段階にある。1年の時から低迷をつづけ，2年になっても変化は見られない。

健康 普通だと思われる。自分でも健康に関して異状を感じたことはないと言っている。

クラブ生徒会活動

テニスクラブに属し，かなり熱心である。2年前期の図書委員であり，普通につとめているが，特に積極的に友人に働きかけるような面は見られない。

友人関係

テニスの面からの友人 数名

教室で席が近かったということで，T生徒（このT生徒は明るく積極的である）

その他

一人の兄が本校卒業生である。

観察記録

4月中旬

本人の父親が来宅，大要下記のようなことを話され，今後よく見てほしいと要望された。

父の言の要旨

〔成績がわるく，かつ熱心に勉強しないので困っている。兄弟の中での自己の地位が確立していない為かと思ひ，兄達なみに今度ほしがっていたギターを買って与えた。だがそれにも熱中するふうでなく，依然としてはは目にはぐうたらな生活がつづいている。どうしたら治せるものであろうか。〕

2年 進級時においてこの生徒の成績は極めて低く，教室内では殆んど目に立つことはない存在であった。あらゆることが成績に関連して判断されるような生徒である。どこかで普通にまたは並以上に活動していることはないかと思ひてクラブ活動の観察に目標をおいた。5月，6月と通じてテニスクラブにおける状況を観察した。

テニスの練習状態は普通のクラブ員と変わらない。クラブで主体になるのは2年生であるから当然練習量も多いが，さぼるようなことはない。技術は2年生中の中堅になるが下級生等に対して特に口を出すこともなくおとなしい存在である。テニスに夢中になっているというふうには見えないが本人なりに一生けん命なのであろう。責任感，指導力などはあまりない。試合などにファイトが欠如している。

7月および8月にはテニスの対外試合があつて出場したが一回戦で負けている。クラブに共通している傾向だが同等以上の相手に対して戦意が弱い。敗れた後でもそんなに口惜しがる風は見えなかった。

本人の反省（これは9月に書かせたものの要録である）

1. テニスクラブの中で自分はつとめて強気になろうと試みた。友人のテニスを見てみると人格と関係があることを知った。
2. テニスをしているうちに学業は全く窮地におちいった。テニスの疲れて十分勉強できなかった為である。しかし生活はなかなか変えられない。

7月になって学業成績について多少でも向上するように努力をうながし、夏休みの生活について方針を立てることを要望した。十分に納得したふうであった。8月中旬からの北海道修学旅行の際は、友人関係を観察することにした。

ところでこの旅行直前、家庭内に突発事件が起った。祖母が交通事故にあい、危篤におちいった為、場合によっては旅行を途中で帰宅の必要を生じたこと、家人が病人にかかり切りで本人をふくめて子供達の生活が一変したことである。これは何れも本人に大人としての生活態度を要求するものであった。

旅行中の交際のようなすは従って制限されているかのようで派手な言動はなかった。もともと目立つ方ではないのだから当然でもある。旅先から帰る方法についてきいて見ると明らかに自信が見えた。

本人の反省によれば夏休の結果は次のようである。

1. 自分の精神のもろさの為に夏休の勉強計画がすぐくずれてしまった。テニスの試合からでたらめとなった。
2. 祖母の事故（9月中旬に死亡）以来、大人としての生活を体験し、あわせて周囲の人をよく見る事ができた。

9月初め、始業式の時に、私はクラス全員に読書の一つの方向として（神、宗教などについても考えて見ること）を示唆した。その後本人と面談して見ると、この点について本人は自己の体験と一致したと言う。つまり8月中旬以後、そうした思索の方向を見つけているわけである。ただしそれは純理的ではなく文学的な傾向を持ち、主として文学作品の中に自己の類型を求めることにあるようだ。

10月になってからは、割合にすらすらと話すふうであるが、心の中にいだいていて他人には話しても無駄だという面もある。また文に書くことも下手だからどうしても表現できないという悩みもあるらしい。いずれにしろ、この生徒は目下模索中である。しばらく読書の相談相手となってやること、そして最も重大な要因であると思われる劣等感を徐々にのぞくことが先決であろう。

兄弟の中においての地位は友人と話し合うといいのではないかとと思っている。今後はそうした点を注意してゆきたい。

へ) 1年 K生徒 (YG個表 (四) K) ホーム主任

要 観 察 非社交的で、非活動性。

家庭環境 父は教師、兄妹3人の5人家族。

学 業 入試の成績は大変良い。一学期の成績も上位にある。

クラブ、生徒会活動体は健康でバスケットクラブ所属、生徒会関係も図書委員に選出されている。

友人はクラブ関係で多いほうである。

日常の観察では、多少口かずが少ない程度で、特に変わったこともなく、諸行事も活潑に

参加し、元気に熱心に学校生活を送っている。(観察記録略)

ト) 2年 L生待(YG個表(22 L)ホーム主任

要 観 察 K尺度が0で極端に自己を良く見せようとする傾向がある。

家庭環境

父 医師

母

兄 三人 何れも金大卒, 年令差は9~6才

姉 二人 何れも大学生

生活状況

1. 学業 学校生活においては特別目立つような所はない。家庭での様子も特に耳にしたことなし。普通の生徒と見て良いであろう。学業成績は極めて良い方に属し、日頃の態度は真面目である。ただし、4月のある日、教室内において、一寸した掃除を命じた時、私の言に対して無視するような行動をとった。対談していても、ポケットに手を入れて平気であるような所がある。漠然とした印象では少しふてぶてしい。
2. 健康 普通と思われる。本人も別に異状を認めていない。
3. クラブ、生徒会活動 何にも属していない。選挙等の場合、投票されたことはない。
4. 友人関係 本人の言によれば、親しい友人として約2名を数える。学校における友人という程度で、特に趣味の友人というようなものでもく、性格上の類似点等の為ではない。私の観察では、何となく孤独性があり、明るいふんい気がないので友人は少ない方である。またエゴイスティックな所があるのではないかと思う。好かれる人物ではなさそうである。
5. その他 8月に実施された北海道修学旅行に際して7月上旬の参加申込の時、不参加を表明した。客観的に認められぬ理由で不参加というケースは2年生中で本人一人であった。その時、本人のあげた理由は次のようなことである。

イ 旅行日程がつまりすぎている。

ロ 自分の兄が京都に就職し、この夏遊びに來いと言っている。その方が面白そうだ。

ハ [この項はあとで分ったことであるが]

兄達が成長したのは戦後すぐの家庭の窮乏時代であって、旅行などには行っていない。

今度自分の番になって、家では皆行けと言うが、自分としては気がすすまない。

ニ 旅行に行っても、友人達と一緒にだからと言って特に面白いとは思わない。

観 察 記 録

Y, Gテストの結果を示されるまで、私はただ成績の良い普通の生徒だと思っていた。

したがって、特に面談したことはない。だが上記のように4月中にこの生徒の自己中心的な一行動を見て、その時、ずるがしこい生徒だと思っていた。5、6月中を通じて特記することなくすぎている。7月上旬の修学旅行の件から、しばしば本人と面談するようになった。はじめ旅行不参加を申し入れて来た時、少しも旅行参加を強制することなく、参加は自由意志であるが、理由を説明せよと言った。それに答えたのが上述の箇条である。私にはそれが家族意識の強さ、ひいては非社交性と見えた。しかし、はっきりそうした理由を明言できる所に矢張りシンの強さを感じた。更につけ加えて京都旅行に必要な割引証を

依頼する態度にもそれが感じられた。さてこれで不参加は決まった。

9月、二学期開始早々、私は本人を呼んだ。休暇中に感じたこと、旅行に参加しないでいてどんな感じであったか等を要点として感想を書いて提出させた。この感想文によれば、不参加の理由はかなり明らかになる。つまり、家庭内で自分ひとりが修学旅行に参加することにためらったことがわかった。と同時に集団生活にとけこんでいないようも分った。昨年来、この生徒が夏実行していることとして、ある浜である距離をひとりで泳ぐ日課がある。これが非常に面白く今年も是非つけて実行したいという希望もあるのであった。多くの友人と異って、この場合はただ一人であることが注目をひく。

又、文の最後になって、こんなものを書かされたことに対する不満らしきものが目についた。こんなことなら旅行に行っても良かった。と言うのである。もし学校が強制的に行かせるつもりならそう言うてくれれば行くのだったと言う。この点については、私の説明に不備があったために行きちがいがおこったのであるが、一方家庭でも、母親が〔行けば良かった〕ともらしていることがあるらしい。勿論、この点は参加が自由意志であったことを納得させておいた。すると次のようなことが考えられる。

この生徒は、いわゆる学校のわくの中で行動することではごく割り切っていて、楽にできるタイプなのではあるまいか、所が自己の自由意思で行動する時になると、ある態度が一つ身についているのではないか、そしてそれは極めて非妥協的な閉鎖的な性格があり、さらに利己的でもある。しかしまた自分の決心についての安定性はどうか、一面それは意志の強さをあらわし、反面、不安定性を示している。Y. Gテストの示す所では意志の強さというものが何か、後天的な見せかけのものであるようにも感じられるのである。

私は、この生徒の、末っ子であるということ、兄姉達の中でどう扱われているかについて、この問題を考えて見ようと思っている。10月初め、そのことで本人と面談をしたが、その時は何ら手がかりは得られなかった。いわゆる末っ子として甘やかされているのではないらしいが、少し毅然として答える態度からは矢張り、末っ子のわがままの匂いを感じないわけには行かない。

現在の所、以上のところまでこの生徒を見たが、指導という点ではこれからの問題であると思っている。

2 ホーム主任の発見によるもの

4) 3年M生徒観察記録(続) ホーム主任

(4月)

2年の後半頃より以前にくらべ、かなり活気もでてきた。1年後に大学進学也希望もある程度もっているようだ。学力に対しては、やはり相当の劣等感をもっているが、彼なりにはりきっているように見える。叔父の方はまさか超弩級に成績が悪いとは思っておらず、母親と本人と二人で、ともかく表面的には叔父に対して虚栄をはっている。しかし、そこには内面的不安をいだいており福井の叔父の家に行くごとに自分でも不可能と思いながら、某一流大学の経済学部志望を表明しているようだ。ともかく、4月中は本人及び母親の内面的な苦痛は別として牛歩の歩みをつづけたもようだ。

(5月)

学校で受験指導として毎日、二時間、放課後実施されている。4月の最初の二三日は、本人も出席していたが、その後全然出席せず欠席することになんの抵抗も感じてない様子だ。

本人も相当気迫も出来た事だし、私に対しては少々甘える気分も見えてきたようなので一度叱った方がよいと考えた。

某日、小生の家に勉強に来たとき、ある問題を手もつけないでポットしているので、ただしてみると、本人の甘えた気持からであろうが、全然わからないとなげやりの態度をとった。この機会に一言いっておこうと思い、わからなくとも解決しようと努力せねばならぬ、更に補習授業の欠席についても注意した。その場は本人はだまっていたが翌日から学校は欠席をはじめた。私がもうそろそろ大丈夫と彼を信頼したのが最大原因である。学校において比較的、私を信頼し頼りにして、かろうじて学校生活をしている生徒にもう大丈夫と考えたことは全く教師としての資格もない大失敗である。一日、二日と彼が出てこない空席を眺めながらやりきれない、自己嫌悪に落ちた。三日目に気分が少し落ち着いたのだろう登校してきた。しかし、極力私を避けて、ホーム・ルームの時間に私が行くときは必ずどこかに雲がくれている。便所に行ったのか、どこに行ったのか、ともかく私と会う可能性の時間は必ずどこかにきえている。

何度か、家庭訪問しようと思ったが、もうしばらくしばらくと様子を見ていた。その後私の家に勉強には来ない、英語の某先生の所にも習いに行っていない。学校での欠席状態は眼にあまるものがあった。私自身も自分の教師としての無識見にどうすることも出来なかった。

(6月)

母親と会う、彼の欠席のうらに拍車をかけた理由がある事を知って驚いた。母親が学校は欠席する、私の家へは来ない、その事を教頭に相談にいった。未亡人という理由か、性格のしからしめるものか、子供の身体の弱い事を理由として話した所、教頭としては当然身体が悪いのだから養生して下さい。欠席の多い事は私と主任でなんとか教官には弁明してあげますという教頭の言葉をきいて、公然と欠席をはじめた模様だ。ただ欠席しても家で机に向かっているのみで、ただ呆然とし、少しも勉強の効果があがっていない実状を私に話した。

私は欠席の理由はたたない。教官会議でも嘘は弁明出来ないことを、はっきりと話した。事実、身体が弱いことから、三学期の雪の降る頃は本当の病気でやすまねばならぬ事が起るだろう。そのときになって、欠席しようにも欠席日数の関係で欠席出来なくなったらどうするかと残酷ではあるが、はっきりと言明した。

翌日から、彼が学校に姿をみせた。自分でも内心ホットした。私の無識見ではあるが、本人の考え方は勿論、母親の考え方にも欠かんがあるように思える。

(7月)

学校に出はじめてか、かなりになる。登校してきて顔を会わし何かと話をしておれば段々と本人の気持もホグレてきた。うれしくなってきた。

補習授業は相変らず欠席しているが、私はもうとがめない。本人がよくわからないものを毎日、2時間も着席するのはひどいだろう。それがまた、学校生活の本道でもない。多分来春、入学試験を受けてもどこも不合格になるだろう。しかし、それが何んであろう一年かかって二年かかってもよいではないか。

それを無理させようとする私自身に無理があったのだ。本人は本人なりに努力している。

功をあせてはならない。もう二度と叱るまい。

期末考査が終ったとき、母親と二人できて福井の叔父さんの家に帰る、9月になったら出てくると挨拶して帰った。

夏休中、叔父さんの家においてどうだろうか。朝から晩まで自分がよくできると示すための虚栄の生活が続くのだろう、精神的に非常に苦痛ではないか。しかし、生活のすべてを叔父さんにみてもらっている二人にとって、どうすべき事があるか。

(9月)

1日は欠席したが3日の月曜から登校してきた。夏休中がどんな状態であったか、腹をわって話したい。しかし、まだそれ程うちあけてくれるだろうという自信もない。それが私のよくない所かも知れない。しかし、こわい、一学期のような事態は二度と起したくない。そのうち、もっともっとうちとける時がくるだろう。

9月中はまずまずの状態でクラスの行事にも顔を出している。非効率ではあるが少しづつでも進歩しているようだ。しかし模擬試験は全然受験しない。それでよい、受験しても悪い成績ももらって、ますます自信を失うだけだ。

知能テストの成績もつけた。案外よいのに驚いた。本質的にはそんな悪い頭の持主でもない。

一人の人間を一人前にするには何んと苦勞の多いことか。しみじみ痛感させられる。

(本生徒については、高校教育研究、条13号に、同教官の昨年度の詳しい報告があるので参照されたい。)

リ) 3年 N生徒観察記録(YG個表(13)N)ホーム主任

YGテストでは、内向的で非活動的なところが見えるが特に異常というほどのこともない。しかし、日常生活を観察していると、極めて内気で、自信のない態度を示しているので問題生徒として取あげた。

家庭環境 父と母は姓が違っている。家計は母が煙草販売、洋裁付属品店を営んでまかになっている。母と姓の違うことを、本人はひどく気にして、他人に公表されることを極端に嫌っている。

学業 成績は中の下程度、金大法文学部進学希望。

クラブ、生徒会活動、クラブは2年まで馬術クラブに所属、生徒会、ホームルームの諸活動では殆ど目立たない存在である。

友人関係 クラブ関係の生徒と多少交わっているが、あまり深くはないらしい。その他の友もないようで、いつも一人ぼっちと言った感じ、談笑している姿を見たことはない。

出席関係 よく遅刻をする。一限目だけでなく、毎時間おくれて教室に入ることがしばしばある。行動が消極的である。

提出物 学校への納金又はその他提出すべき大切な書類でも期限を無視して、はらはらさせるような、ルーズなところがある。

育英資金申請を通して

父母の姓が違い、家計の支柱は母になっている。年収12万円、余り少ないので本人に聞いてみたが要領を得ない。後、教育委員会より、その点について問い合わせあり、本人に再び尋ねると、赤面しておどおどしている。それ以後、他の用で本人を呼んでも、例のことに触れるのではないかと、私を敬遠する風が見えた。いつも、不安な気持ちでいるのでは

ないかと心配になる。自分の境遇について悩んでいるようだ。

母との面談、本人は、家庭では特に変わったところはない。母を責めることもない。ただ学生らしい若々しさが欠けている。無口な方である。さびしさが身につきまわっているようだ。

指導 本人と時々面談するが、家庭の話は避けて、専ら大学入試のことに限る。進学ももう少し頑張ると入学できると、具体例を添えて説明すると、いくらか安心している様子である。自己の運命を自分で解決すべきであると励まして、力づけている。

ヌ) 1年 O生徒 (YG個表 (14)O) ホーム主任

YGでは、内向的で支配力なく、やや神経質な生徒であるようだが、特に異常とまでは行かないようだ。主任の観察によれば、いつも情緒が動揺して落ち着きがない。原因としては、性格的なものが、成績の不振から強く現われたものと思う。

家庭環境 両親健全、恵まれた家庭。末子のため相当甘やかされていたようだ。

学業 中学時代は中の上程度。田中A式では55であったが、高校に入ってから知能検査は田中B式で68、きわめて優秀である。それにもかかわらず、学業は1年生の最低で、本人も大分気にしているようである。

クラブ、生徒会活動、中学1年のとき、ホームの書記をやった以外は、役員の経験はない。クラブは、高校へ入った当初、テニスに入ったが、おもしろくないのでやめる。山岳部があれば入りたいと言っている。

友人関係 中学二年まではだれとも交わっていたが、三年から、自分の成績が不振なため、友と話をさけるようになって、次第に交際しなくなった。高校へ入った時は、中学時代の同じクラスの生徒と多少話したが、次第に自分で殻にとじこもるようになって、現在は友と呼ぶものはいないという。実際、体育科の友人関係の調査でも、第一回には、支持され、自分の支持している生徒も二三あったが、一学期の第二回調査によると、だれからも支持されず、まただれをも支持していなかった。こんな例は、この生徒一人のみである。

観察記録

4～5月、5月はじめ個人面接する。下をむいたままで口数少なく答えるのみ。おどおどと落ち着かない感じ。21日に欠席したので理由を尋ねると「休みました」と答える。理由にならないので重ねて聞くと頭痛の由、この間やはり顔を上げない。

6月 月初めにまた欠席あり、今度は風邪のようだ。届書を提出するようというと、「今ですか」と答えて、用意した届を出した。何か調子の合わない感じである。中間試験の成績は最低に近い。数学は本校教官に家庭で習っているとのこと。

7月 個人面接をする。彼は私の話を聞いてしばらく黙っていた。中間試験より少し下って、君の下にはあまりいない。もっとしつかりやるようにというようなことを話した。しばらくして、突然「僕は最低ですか。」と、思いつめたように言う。実際悪いけれども平均点も62点だし、しかも、今年の生徒の差はごく僅かで、少しの点数が席次に大きくひびくものだから、席次を気にしないで、力をおとさず励むよう、君も優秀な才能があったから本校に入学できたので、何もあまり卑下しないで、やれるだけやってみようとう励ます。

休暇に入って、水泳、登山の行事があったが、彼はどちらにも不参加、他に不参加者は数人あったがそれぞれやむをえない理由があったが、彼のみは理由があいまいで、おもし

るくないからだと言っている。それでいて、ひとりで海へ行ったり、山を歩いたりするのは好きのようである。団体行動を嫌う態度が感じられる。それも、友達がいないということに大きな原因があるのではなからうか。

9月 始業式の日、登校途中にであろう。色が黒くなったなあと言うと、「そうですねこれでも大分白くなったのですよ。」と案外明るく話してきた。休み中何をしてあったかを尋ねると、「遊んでばかりいたので、まっ黒になったのですよ。」ときわめて快調。この調子で二学期を送って欲しくないかと念じて別れた。数日後に呼んで話をする。友達のないことを正直に告白して、自分の性分だからしょうがない。それでも、つとめて話をしようすすめると、自信なさそうであったが納得したようである。一学期までを反省して今まであまりにも無自覚に過してきたが、これらはひとりに負けないようにしっかりやりたいと、話はどうしても勉強の方にうつる。しかし、特別暗い感じもなく、前よりはすらすらと、明るい調子で笑顔を見せながら語っておった。もう少しだという気持で別れる。9月末にまた面談する。大体よい。現在の自分の最大の務めは頑張ることだと思うが、中学から一緒に来た数人の友にはどうしても及ばないということ。自分の内気な性質はなかなかおならないが、あまり気にしないよう心掛けようと思っていると語る。その気持を大いにほめてやる。君にとって、その劣等感 はほとんど無意味なことなんだから、できるだけ明るく楽しい生活が送れるよう努力することが必要だと励ます。今回はもっと私と話をしたいような態度であった。この調子が崩れないようにと念じている。

自叙伝より

幼児 父の職業の関係でしばしば住居が変った。比較的恵まれた家庭で、戦後の混乱期も平穩に送っておった。はじめ幼稚園へ行くのを嫌っていたが、すぐ友達ができた。キリスト教系で、子供心にも宗教心がうえつけられて良かったと思う。一般に日本人の宗教心のたりないことを現在感じている。末子ではにかみやで気が弱く、いつもしかられるのを恐れながらも、相当いたずらをして、園児時代は楽しかった。

小学生 6年間女教師担任、勉強は大体うまくいったと思う。学校へ行くのが好きであった。特に理科、図画が得意。嫌いなのは音楽で、歌をうたわないで先生を困らせたことがある。在校中は模範生であったと思う。しかし、学校でも、家にあっても、いつも遊んでいたようで楽しい生活を送っていた。2年のとき絵で表彰され新聞に名前がでた時は嬉しかった。また子供の自転車を買ってもらって当時大友友達から珍しがられたことがある。

中学生 1年のときは、小学生と同じく元気いっぱいであったが、成績は中位か。2年から3年にかけて、はつらつさがなくなった。勉強しなければならないという気持だけが大きく頭を占めて、それでいて何をすることもなく、ぶらぶらと時間を過すのが多くなったようだ。楽しい思い出があまりなくなってきた。友達と遊ぶことも殆どない。

3 申しいでによるもの

ル) 3年 P生徒 (YG個表 (15)P) ホーム主任、補導部

YGテストでは、殆ど問題はない生徒である。2年の後半から悩みをいだきつづけておったもので、家庭環境では、両親と兄弟4人であるが、兄2人は大学に行っている。この兄は先妻の子であり、本人と妹が現在の子供である。従って、兄は家庭事情で相当苦しんでおったらしい。しかし、本人は、長兄に対しては多少気づまりな気もするが、次兄が理解があるので家庭内で特に悩むこともないようである。一番悩みに思っているのは、2年の時の告白であるが、このまま3年になっても、今まで入学当初からの基礎の勉強をして

いなかったので、満足な力をつけることができない。浪人は必至である。それよりも、現在学習していることが理解できないので学校に来てもおもしろくない。家にあってもごろごろしているのみである。どうしたらよいかというのが悩みであった。

そういう考え方はあますぎるので、もっと友達に負けないよう、頑張ったらどうかと言って一応励ましておいた。そのうち、また相談に来て、このままの状態ではどうにもならないから1年間遠い寺でも行って勉強したいと言いだす。それについても、問題にするほどのことはない相談に応じなかった。

ところが、3年の5月頃になって、再びそれを告げ、自分はこのままの状態ではほんとにだめになってしまうと、相当深刻な態度である。親友も2、3人おるが、彼等とも相談したが、だれも応じてくれない。思いあまって、父に打明けたらしい。父が早速、自宅に来て本人の気持を告げた。昨年来からの事は父にも打明けていなかったもよう。父としては、やはり普通に学校を出てもらいたいらしく、たいした理由もないのに休学もできないことだし、大学が失敗して浪人するのはやむをえないとしても、予め卒業を遅らせることは常識的に考えられないという。しかし、本人の気持が、一時的なものでなく、1年近く考え続けて来たことなので、その気持も汲んでみようという気持になった。5月末、1週間ほど休んで、郷里の叔父（精神科医師）に診断やら相談やらに、本人は出かけて行ったが、叔父の意見では、本人の意志に反対、精神的にも異常なし、そんな気の弱いことではどうするかと、相当注意されたらしい。しかし、この期の年令では、理くつはどうかろうと、自分の思いこんだ気持はなかなか変らないようで、学習態度は依然弱く、受験勉強も授業もいじ加減にやっている模様。

再三懇談をして、本人の考えがどうしても変わらず、しかもますます元気がなくなってゆく状態なので、主任と補導部で相談し、本人の気持を汲んで、7、8月を寺にやらせることに相談をまとめて、本人に連絡すると、大変喜んで、早速準備にとりかかった。両親もそれだけ強い子供の心に負けて許してやる。

厳しい環境、誘惑の起り得ない環境ということで、交通の不便な山里の寺を選んで7月から生活が始まった。本人の切望しておったことなので、大変好調に8月まで終わったとのこと。ただし、勉強の方は、暑い夏の盛りとあってたいして効果もなく、漸く数学の1年の部が終った程度。本人としては、どうしても本学年いっぱい籠って、英、数、国の三課目の基礎を作りたいと言っていた。もし、寺にあって能率が下るようなら必ず学校へもどってくると言って、本人なりに真剣な気持が見えるので、これもやむを得ないとその成行きを現在もみつめている状態である。

五 結 語

問題生徒の発見と指導という作業に取り組んで、今年は第5年度を迎えたが、その成果は遅々として進まない。それでも、過去を振り返ってみて、われわれなりに、一歩ずつでも前進していると信じて、今後もこの作業は続けてゆくつもりである。われは教師なりという自覚のある限り、学習指導と並んで生徒指導は永久に続くことであろう。某高校では、学校は学習の場であり、教師は生徒に学問を与えるものであるから生徒指導は不要であるといっているとか聞く。もし、非行等の問題生徒がでたならば、警察なり感化院なりの機関にまかせておけばよいと言う。それで、生徒が健康に学問に励んでいるならば、きわめて簡

単に話はすむと思う。また、ある学校の教師は、大体問題生徒の指導なんてできるものではないと言う。いくらこちらが親身になって指導しても、一たん染まった悪からはぬけられないものだ。そんな人間には、どんなにつくしても無意味であるという。この考えもたしかに事実を持っていると思う。

しかし、われわれは、第一に問題生徒を、非行を意味する不良生徒にしているのではない。勿論、このようないわゆる反社会的問題行動をもった生徒もふくまれるが、幸いにして本校では、この問題で悩まされることが非常に少ない。そして、今後とも、このような生徒を出さないように教師も生徒もおたがいに心をつかっている。問題生徒の第二は、非社会的問題行動をさすので、消極的になり、無気力な、劣等感、ノイローゼ等になってゆく生徒がある。しかし、彼らも、何等かの誘因があれば、反社会的行動を起す可能性をもっている場合がある。ここに早期発見の意義があると思う。

問題生徒を以上のように考える時、学校では生徒指導は不要であるという論はなりたないと思う。高校生の年令層は、人生の長い一生のうちで、最も深刻に、純粋に悩む時期であると言われている。従って、悩まない生徒はよほど恵まれた人間か、あるいは精神発達のおくれた生徒と言ってもよいくらいだということも聞いている。その悩みのなかで、異常なまでに傾いた生徒に対しては、やはりわれわれはできるだけ手をさしむけてやらなければならないと思う。本校の生徒指導も、こういう考えに立って行なっているのである。

ただこの際、学校の教師が、どこまで立入って指導すべきかということが一つの問題として残るだろう。われわれが一人の生徒に接する時間は極めて少ない。そして、それぞれに教科の授業を受持っている。精神衛生の専門的な知識も持っていない。われわれ自身の時間も持たなくてはならない。また、問題自体の立場から言っても、その問題がわれわれ手の及ばない所に行っている場合もある。こういう事情を総合して、指導の限界点というものがどうしてもおこってくる。しかし、その場合でも、適当な諸機関にゆだねてやって、彼らが1日も早く立直ってくれるよう念ずる心だけは失ないたくない。

従って、問題生徒の指導の万全を期するためには、学校の立場にあっては、できれば専門知識のある補導員の専任ということが望ましい。やむをえなくとも、補導部の強化、訓育と補導の職責の確立、相談室の整備、必要時間の確保等の、組織と体系の確立をすることが今後の問題として残るだろう。

とにかく、われわれの歩みはおそくとも、少しずつでも、より秀れた生徒指導に向って進んで行きたいと思っている。

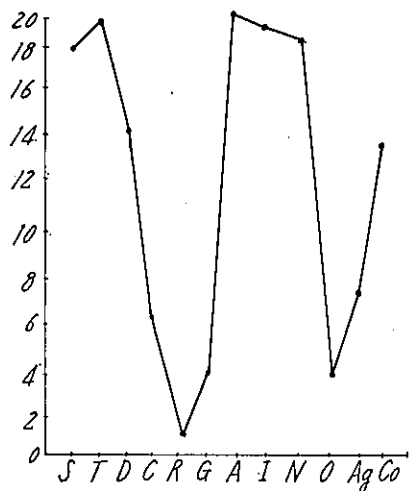
終りに、金大の多田先生、前校長村上先生の厚い御指導に深く謝意を呈すると共に、本校全教官の御協力がなければ、なしとげられない作業であることを深く信じて謝する次第である。

Y G 個 表

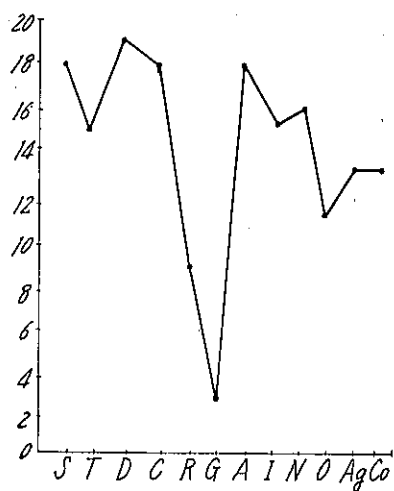
——線 37年度
線 36年度

N 型 又 ハ N 傾 向

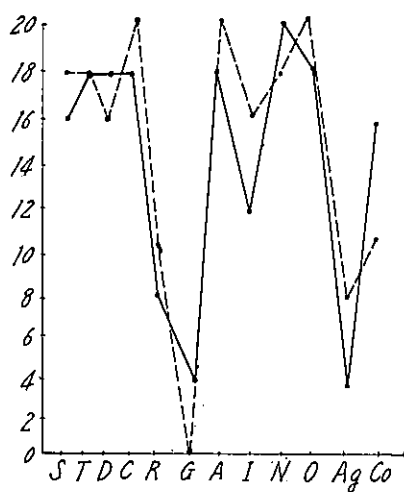
(1) 1年A生徒



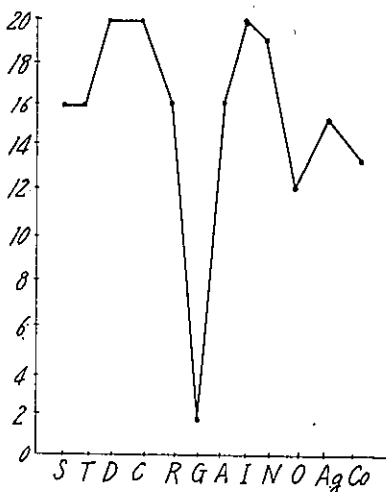
(2) 2年B生徒



(3) 2年C生徒

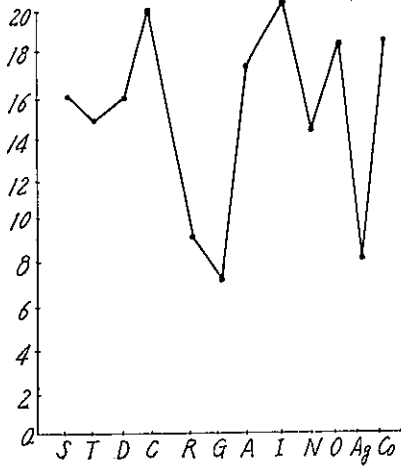


(4) 2年D生徒

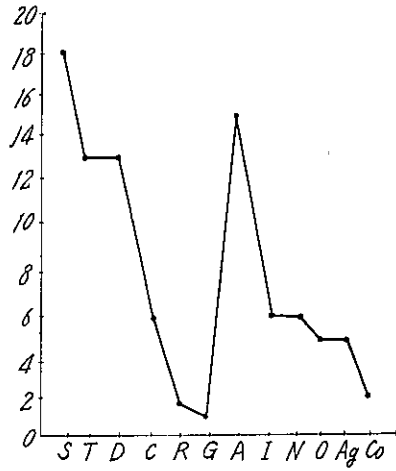


E 型又ハ E 傾向

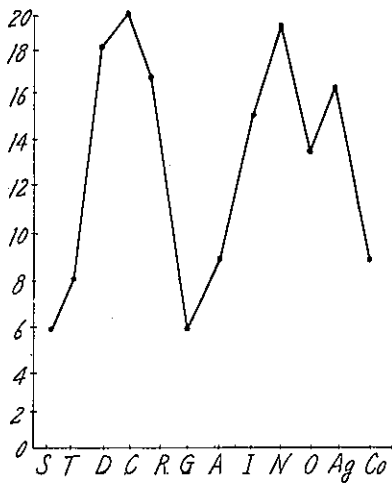
(5) 3年E生徒



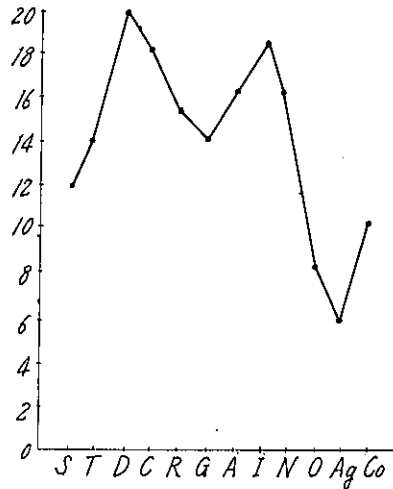
(6) 1年下生徒



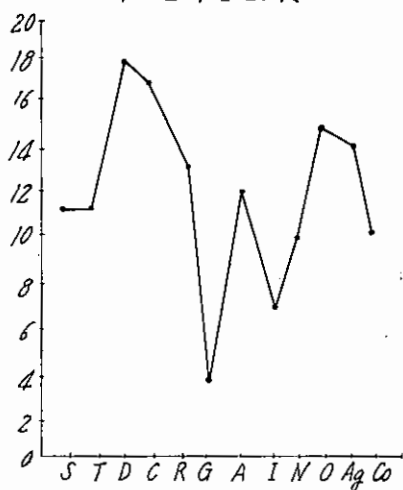
(7) 2年G生徒



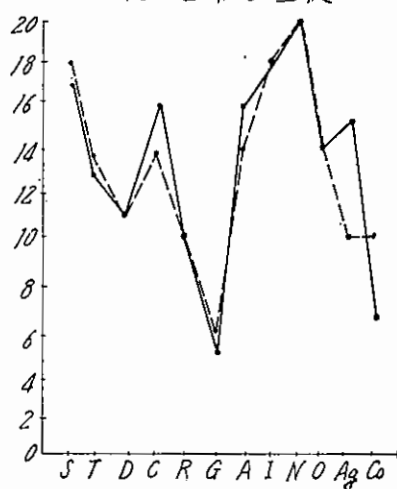
(8) 2年H生徒



(9) 2年I生徒

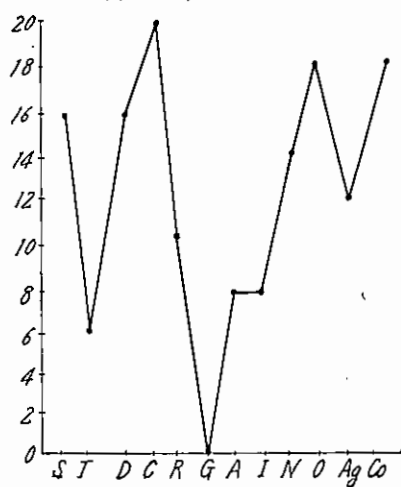


(10) 2年J生徒

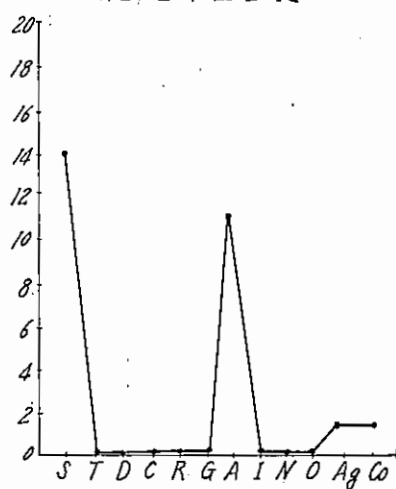


要 観 察

(11) 1年K生徒

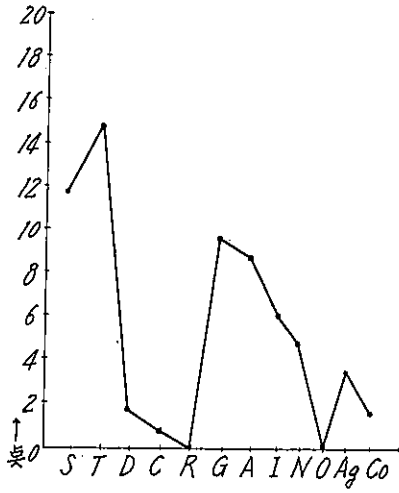


(12) 2年L生徒

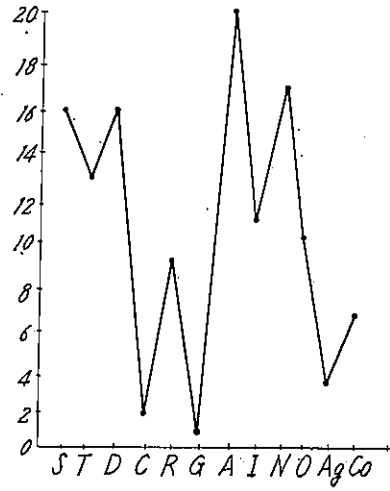


そ の 他

(13) 3年N生徒



(14) 1年O生徒



(15) 3年P生徒

